

2026
7/23(木)

四万十市事前復興まちづくり計画 第1回 八束地域ワークショップ

第1回 八束地域ワークショップを開催しました

令和8(2026)年7月23日(木)に第1回 八束地域ワークショップを開催しました。当日は、16名の方にご参加いただき、八束地域の復興まちづくりについて様々なご意見をいただきました。

ワークショップでは、「ご自宅の危険性を確認しよう」、「避難生活から復興までの住まいの場を想像してみよう」をテーマに、4班に分かれて意見を出し合いました。

ワークショップ

各班に分かれて、活発な意見交換を実施しました。



発表

検討した内容について、それぞれ発表していただきました。



避難生活から復興までの住まいの場を想像してみよう

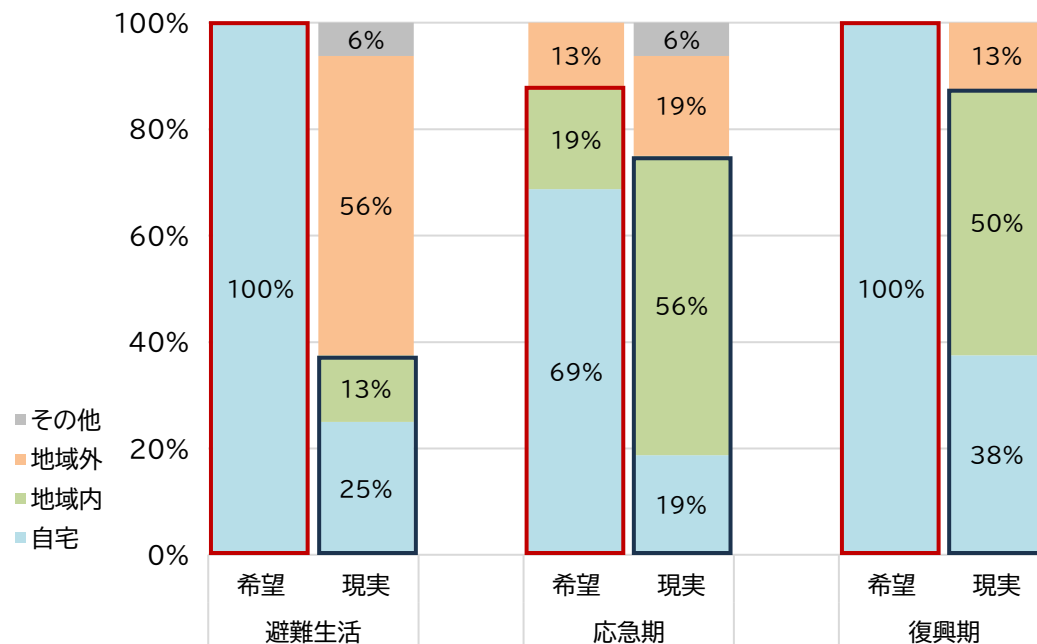
避難生活、応急期、復興期のそれぞれの段階での住まいの場について話し合いました。

避難生活から復興期では、地域内を希望する方が全員または約9割と高くなっています。しかし、地域内の大部分が津波浸水想定区域に位置していることから、現実では地域外を選択する方が多くいました。

避難生活は、現実的に自宅には住めない可能性があり、地域外を選択せざるを得ないとの意見が多くなっています。

応急期は、地域内を希望する人が約9割と高くなっていますが、地域内で必要な数の応急仮設住宅を確保できるのか、また、地域外の場合、現在のコミュニティを維持できるのかとの意見が出ました。

復興期は、資金面や年齢等に関する意見が多くなっています。



第2回ワークショップは、2026年10月13日(火)を予定しています。
第1回目にご参加された方はもちろん、予定等により参加できなかった方もぜひご参加ください。
詳しくは、10月号区長文書にてお知らせさせていただきます。



お問合せ

四万十市役所 防災まちづくり課
TEL:0880-35-2044(直通)
〒787-8501 四万十市中村大橋通4丁目10

避難生活期

発災

発災直後～10分
：避難

1～7日：
救助を待つ

～3ヵ月～半年：
避難所等で生活

～2年～5年：
仮設住宅等で生活

それ以降：
生活を立ち上げる

避難生活

生活をおくる場所	選んだ理由	心配なこと	心配事の解決に向けて必要なこと
1. 自宅(倒壊等のおそれがない、速やかな修理が可能な場合)	住み慣れた地元 住み慣れた地元 知り合いが多いため 住みやすい ストレスなく生活できる 被害がない場合は自宅 浸水区域外だから 浸水被害がなければ、自宅 耐震設計で建てているため 多少の食料を備蓄している	その他災害のおそれ 自宅周辺の山が崩れないか心配 液状化被害のおそれ 孤立のおそれ インフラ・ライフライン ライフライン(電気、ガスなど) 道が利用できるのか心配 食料等の確保 自宅にいる場合は、避難所に物資を取りに行く必要がある 食料不足が心配 田畑の管理 元々の家(旧家)の管理 大工さんが不足するおそれ	県や市の協力(砂防堰堤などのハード面の整備) 災害時の電力確保に備えた準備 発電機 太陽光発電 燃料
2. 地域内	住み慣れた地元 住み慣れている 地域外へ行きたくない	集会所の裏山が崩れるおそれ → 名鹿集会所自体が安全か心配	地域内の避難所運営などの防災訓練の継続
3. 市内(まちなか等)	大人数が収容される避難所は、プライバシーが確保できないため 市内の親せきの家	子どもの家には、長期間は住られない 長期間の避難生活となると親せきの迷惑になるおそれ	地域外とも連携した避難所運営などの防災訓練の実施
4. 市外	市外の親せきの家		

■ 応急期



発災直後～10分
：避難

1～7日：
救助を待つ

～3ヵ月～半年：
避難所等で生活

～2年～5年：
仮設住宅等で生活

それ以降：
生活を立ち上げる

	生活をおくる場所	選んだ理由	心配なこと	心配事の解決に向けて必要なこと
応急期	1. 自宅(倒壊等のおそれがない、速やかな修理が可能な場合)	住み慣れた地元 - 住み慣れた地元 - 知り合いが多いため - 生活するのに便利 - 住みやすい - ストレスなく生活できる 家・畑の管理 - 畑仕事があるため - 田畑の管理 - 元々の家(旧家)の管理	- 地域外へ出た方が心配 - インフラが復旧しているのか心配	
	2. 地域内	住み慣れた地元 - 自宅の近くがよい - 近所の人の近くに住みたい - 平時のコミュニティを維持したい	交通 - 車が利用できるのか - 道路が復旧しているのか 応急仮設住宅 - 全体的に土地が低いいため、適地が見つからないおそれ - 地域で応急仮設住宅を確保できるのか心配	- 強靱な道路の整備 既存施設の活用 - 四万十カントリークラブ - 旧八束小学校 - 八束保育所
	3. 市内(まちなか等)	- 地域内には安全な場所が少なく、無理だと思う - 市外の親せきの家	- 顔なじみのない人と暮らすことができるのか心配 - 長期間となると親せきの迷惑になるおそれ	
	4. 市外			

復興期



発災直後～10分
：避難

1～7日：
救助を待つ

～3ヵ月～半年：
避難所等で生活

～2年～5年：
仮設住宅等で生活

それ以降：
生活を立ち上げる

	生活をおくる場所	選んだ理由	心配なこと	心配事の解決に向けて必要なこと
復興期	1. 自宅	住み慣れた地元 家が安心する 地域の人との信頼関係があり、精神的に安心できるため 家・畑の管理 田畑の管理 元々の家(旧家)が被災を免れた場合は、管理が必要のため		
	2. 地域内(近隣含む)	住み慣れた地元・助け合い 地域コミュニティ 顔の見える関係づくりができています 近隣同士の声掛けや助け合いが継続できる 住み慣れた地元 知り合いが多いため 百姓が多いため、地元がよい	金銭面 高台造成等には、時間を要す	災害公営住宅の整備 西南空港の候補地であった場所を造成する
	3. 市内(まちなか等)	地域内は復興に時間がかかると思われるため 津波の被害がない地域へ移転	条件 被災時の年齢 お金	災害公営住宅の整備
	4. 市外			